

領域6合同オンラインインフォーマルミーティング 議事録案

2022/ 9 / 15 (木) オンライン開催 19:00 ~ 19 : 45

記録者：廣戸孝信

参加者：北野、枝川、古石、石黒、延兼、廣戸他 (Zoomの全参加者は33名)

0 全体説明 (石黒)

Zoom の使用上の注意と意思表示の仕方に関する説明

1 領域代表・副代表について (北野)

(ア) 現領域代表・副代表の確認

① 現領域代表 (2022 年 4 月 ~ 2023 年 3 月)

北野 晴久 (超伝導・密度波, 青学大理工)

② 現領域副代表 (2022 年 4 月 ~ 2023 年 3 月)

枝川 圭一 (準結晶, 東大生研)

(イ) 次期領域代表・副代表の承認

(今回の承認事項)

① 次期領域代表 (2023 年 4 月 ~ 2024 年 3 月)

枝川 圭一 (準結晶, 東大生研)

② 次期領域副代表 (2023 年 4 月 ~ 2024 年 3 月)

白濱 圭也 (超低温, 慶応大理工)

特に異論なく承認

2 領域運営委員について (石黒)

(ア) 現領域運営委員の確認

古石 貴裕 (液体金属, 福井大工, 2021 年 10 月 ~ 2022 年 9 月)

石黒 亮輔 (超低温, 日本女子大理, 2021 年 10 月 ~ 2022 年 9 月)

廣戸 孝信 (準結晶, 物材機構, 2022 年 4 月 ~ 2023 年 3 月)

延兼 啓純 (超伝導・密度波, 北大理, 2022 年 4 月 ~ 2023 年 3 月)

(イ) 次期領域運営委員の確認 (前回のインフォーマルミーティングにて承認済み)

梶原 行夫 (液体金属, 広大院先進理工, 2022 年 10 月 ~ 2023 年 9 月)

長登 康 (超低温, 広大院先進理工, 2022 年 10 月 ~ 2023 年 9 月)

(ウ) 次々期運営委員の推薦・承認

(今回の承認事項)

橋爪 洋一郎 (準結晶, 東京理科大, 2023 年 4 月 ~ 2024 年 3 月)

友利 ひかり (超伝導・密度波, 筑波大数理物質, 2023 年 4 月 ~ 2024 年 3 月)

特に異論なく承認

3 日本物理学会 学生優秀発表賞報告（石黒）

(ア) 第 77 回年次大会（2022 年）受賞者

- ① 液体金属：松谷健太（山形大院理工）
- ② 準結晶：飯島弘貴（東工大理）
- ③ 超低温：吉田研介（東大低セ）
- ④ 超伝導・密度波：徳田将志（阪大理）
- ⑤ 超伝導・密度波：前垣内舜（東工大理）
- ⑥ 超伝導・密度波：Sahand Najafzadeh（ISSP, The Univ. of Tokyo）

4 領域 6 学生優秀発表賞に関する規約について（石黒）

(ア) 領域 6 学生優秀発表賞に関するこれまでの意見

領域 6 では、講演申し込み時の「学生優秀発表賞に応募する/しない」の選択肢に関わらず、一般講演で口頭発表する学生全員を審査対象としている。この点に関して、これまでの主な意見は以下の通り。

- ① 受賞人数が審査対象者の 10%程度とされているので、受賞者を出すには最低 10 人程度必要である。審査対象者を多くするために、「応募する/しない」の選択肢に関わらず、一般講演で口頭発表する学生全員を審査対象とするようになった。（これらは応募要項に記載済）
- ② 何らかの意思・事情に基づいて「応募しない」を選んだ講演までを強制的に審査対象として良いのか（発表賞審査を受けることを自主的に辞退する権利はないのか）
- ③ 領域 6 の HP での記載と、実施要項での記載が異なっているのは良くなく、整合させたほうが良い。

これらの意見を踏まえて、領域代表、副代表、運営委員で検討をしたところ、**実施要領の改正は行わず、各分野の運用方針は運営委員の引継ぎ資料に記録することを提案する。**

提案は以下の通り、

(イ) 審査の対象となる学生について

- ① 審査対象は現状の領域 6 における実施要綱通りに発表の学生全員を対象とする
- ② ホームページの「応募の有無のチェックに関わらず」の文章については削除
- ③ 詳細な運用については各分野の裁量とする
(③は前回のインフォーマルミーティングにて確認済)

(ウ) 学生優秀発表賞に応募していない学生の受賞について

- ① 受賞の辞退を認める。
- ② 辞退の意思が明らかになった時点で学生の意思を尊重し手続きを行う。
- ③ 繰り上げ受賞等、詳細な運用は各分野の裁量とする。

領域代表の北野先生より以下の補足説明がなされた。

(ア) 本議題は 1 年以上議論されており議論を伸ばしても仕方のないこと

(イ) 領域 6 の 4 分野でそれぞれ事情が異なることを考慮すると、領域内で一律な線引きをするのは難しく、そのための実施要綱の改訂は現実的ではないこと

(ウ) これらの事情を鑑みて、審査の方法は分野内の裁量として進めるのが良いのではないかという趣旨の説明がなされた。

これらの提案に関して、以下のような質問が挙げられた。

① 受賞の辞退を認めるといった内容はどこかに記載するのか？

=> 記載はせず、受賞のチェックが入っていない場合は、本人の意思確認を行うという運用をする。

一連の提案について特に異論なく承認された

5 領域委員会 (5/19) 報告 (北野)

(ア) 2022 年秋季次大会 (2022 年) 招待・企画講演、シンポジウム講演の採択結果

(素核宇ビーム領域、物性領域の各プログラム小委員会で審議)

- ① 招待講演: 3 件 (内, 物性 1 件) 採択
- ② 企画講演: 12 件 (内, 物性 2 件) 採択
- ③ チュートリアル: 5 件 (内, 物性 5 件) 採択
- ④ 米沢賞受賞記念講演: 0 件 (シンポジウム内で 1 件実施, 物性)
- ⑤ シンポジウム (一般): 10 件 (内, 物性 7 件) 採択
- ⑥ シンポジウム (共催): 1 件 (内, 物性 0 件) 採択

※不採択 0 件

(イ) 招待・企画講演、シンポジウム講演申請に関する以下の注意事項が述べられた

- ① 内容説明が十分な提案書の作成
- ② 締切後の提案は原則認められない (運営委員に早めに知らせる)
- ③ 非会員を招待する必要性・理由について追記, 非会員登壇者に物理学会へ入会の勧誘
- ④ 共催シンポジウムの活用

参考として、案書はポイントを押さえて分かりやすく作成する旨の説明があった。

(イ) シンポジウム講演の位置付け

ある一つのテーマに沿って、そのテーマを代表する研究者が様々な角度から一般講演とは違った時間枠で講演する。

(ロ) 内容説明

- ・テーマが何かを明確に読み取れるように説明する。
- ・全ての講演者について、講演内容とテーマとの関係を説明する。
- ・「主題名」、各講演者の「講演題目」もテーマを意識した名称にする。

(ハ) 所属重複規制 (特に提案者) について理解する。

(ニ) 合同領域は事前に連絡、確認する。領域委員会でも追加可能。

(ホ) 運営委員、代表は提案書をチェックする。

参考として、物性領域プログラム小委員会での議事報告があった。

(イ) 非会員の招待講演者：この機に物理学会への入会も併せて依頼して欲しい。

(ロ) シンポジウム：各講演者と引用・参考文献の対応、合計時間（上限：3時間30分）を確認。上限を超える場合、再調整または理由書が必要。不備がある場合、「条件付き採択」となり、再提出後、大会担当理事の承認を受ける。

(ハ) チュートリアル講演：提案の意図が伝わるよう、「〇〇入門」など題目の工夫が求められる。

(イ) シンポジウム申請に関する意見

申し込む際に、記載漏れや講演時間超過がないよう、申し込みサイトに工夫をするほうが良いのではとの意見が寄せられた。

(事務局からの回答)

申し込みサイトには、すでに引用・参考文献の入力欄と注意書きの記載がある。時間超過に関し、3時間30分を超える場合の対応について注釈を入れることを検討する。

(ウ) オンライン大会の定期的開催について

① 前回 IM 等でまとめた意見を各領域から報告（4月）

領域6からは、以下の意見を報告した。

(イ) 3月のオンサイト開催が直前でオンライン開催に変更され、旅費(相当額)の年度内執行で問題が生じた

(ロ) 会場提供負担軽減の観点から、規模が大きい年次大会をオンラインにする方が合理的

(ハ) 9月をオンサイト開催にする場合、台風の影響が懸念される

(ニ) 秋学会を年次大会とし対面、春学会を分科会としオンラインとするのが良い

② 様々な意見があるが、「年1回対面開催+年1回オンライン開催」への強い反対はなかった。

③ 理事会から提案された「オンライン大会の定期開催」を本領域委員会で承認。

④ 領域委員会に参加した各領域代表から上がったコメント、意見として

(イ) 研究費等の都合や学生のスケジュールを考慮すると春がオンラインのほうが良い。

(ロ) 領域13の高校教員の方は、秋がオンラインの希望が多い。

(ハ) ビーム物理領域は年次大会のみの開催なので、春に年次大会を現地開催希望。

(ニ) 年次大会、秋（春）季大会を交互にオンライン開催にするのもよいのではないか。

(ホ) 応物でハイブリッド開催の現地実行委員を行ったが、思った以上に現地の負担が大きかった。

(ヘ) 育児中の研究者にはオンライン開催はメリットが大きい。

(ト) オンライン開催は国際化を進めるのによい。学生のスキル向上にも役立つ。

(チ) 学生、若手研究者のために現地開催は必要なので対面やりたい人も多い。

6 合同セッションへの参加（梶原）

領域12（融合分野）と領域11（統計力学・物性基礎論）が毎回合同で「ガラス関連」セッションを

開催している。ここに領域 6（金属分野）が新たに参加することを検討している

- (ア) 領域 6 と領域 12 は同じ「液体」や「ガラス転移」を取り扱っており、領域を超えてもっと議論や人的交流を進めた方がよいと長年感じている（梶原先生）
- (イ) 実は何名かはこれまでも両領域を横断して発表を行っている。これを個別にではなく、もっと組織的に行っていききたい
- (ウ) 既に第 2 キーワード（現象）として「ガラス転移」「過冷却液体」が存在しており、これらを選択した場合に、合同セッション枠での発表として取り扱う（検討する）
- (エ) 実は領域 6 には定例の合同セッションが一つもない。積極的に合同セッション開催を目指した方がよいと思われる（by 代表）
- (オ) 合同セッションの日程については、領域 11 の拘束条件（合同セッションが 4 つある）が厳しいため、今まで通り領域 11 と 12 で早めに調整し、決定次第領域 6 に通知する対応を取る。
- (カ) 今回の学会期間中、領域 12、11 の IM でも議論がなされ、領域 6 の参加については既に了承されている。

これらに関して、以下の質問が挙げられた。

- ① 合同セッションは次回の学会から始めるのか？

=> 梶原先生より他領域との間でその予定で動いているとの説明があった。

特に反対意見は無く、承認された

7 一般講演発表件数の推移・概要提出率について（石黒）

(ア) 領域 6 の発表者数は前回とほぼ同じ

（口頭発表 93 件(内学生 50 件)、ポスター発表 20 件（内学生 16 件））

(イ) 学生の発表数も前回とほぼ同じ

(ウ) 領域 6 の概要提出率は物性全体の平均を下回っている。

（物性全体で 95.4%、領域 6 は 92.9%）

8 国際会議などのお知らせ（石黒）

(ア) 第 28 回渦糸物理ワークショップ (VPWJ 2022) （北野）

2022 年 12 月 15-17 日 於：青山学院大学相模原キャンパス

実行委員：北野 晴久（青学大理工）

9 2022 年秋季大会の運営（ハイブリッド開催）についての意見について

(ア) 申し込みが遅れてオンラインの参加だが、ハイブリッドは難しいという印象を受けた。

特に、質疑応答が全く聞こえず、また、レーザーポインタでの指示の個所がよくわからない。

=>Zoom でのご参加のみの先生には特にご不便をかけたと思われる。次回以降の運用の際の参考にする。

(イ) 申し込みが遅れてオンラインの参加だが、ネットワークの関係で、音声などが聞こえづらいこ

とがあった。 ネットの負荷が大きすぎるのでは？

(ウ) 参加登録をついうっかりして、という例が多い。

=>ハイブリッド開催は初めての試みなので、Web ページで告知はしているものの、参加登録の事前登録の呼びかけの徹底などは要検討。

物理学会秋季大会運営委員をされている大熊先生より、ハイブリッド開催の改善点等あれば、領域代表・大会運営委員等に、申し出てほしい旨のお願いがあった。

最後に閉会にあたり、9月で任期満了となる石黒先生・古石先生よりそれぞれ挨拶があった。